



木枯らしと時雨

村松照男

気象衛星センター所長

晩秋から初冬を代表する風物詩に木枯らしと時雨がある。低気圧が発達しながら日本海からオホーツク海に抜けると、大陸でたまり始めていた寒気が誘い込まれたように南下し、秋一番の寒波が日本列島を吹き抜けると木枯らし一号の襲来となる。木枯らしに揺れる木々の枝々の動き、散り流れていく落ち葉の舞うのを見て、見えざる大気の流れ、風を見ることが出来る。

風が木々の細枝を揺らし、電線を振動させて渦を作りヒューヒューと音を出す。人が聞くことができるカルマン渦*であり「虎落魚」となって風を聞くこともできる。気象衛星の写真を見ると、大海に浮かぶ孤峰、チエジュ(濟州)島や利尻島の風下側に二列の雲の渦の列が並び、カルマン渦による雲の渦を通して見えない風を見せてくれる。島のサイズが大きく周期が一時間から数時間と長いため、残念ながら人の耳では聞くことができない。春一番が冬の季節の一瞬の緩みを突いた春

の使者で華やいだ響きがあるのとは対照的に、木枯らし一号はみぞれ混じりの時雨で日本海側の地方を低く暗鬱な雲で覆い、きたるべき冬を予感させる静寂と厳しい響きをもっている。平安末期、官僚政治、摂関政治が行き詰まり院政を巻き込んだ内紛に、源平の武士の勃興と盛衰という混沌流転の狭間で懊悩して出家、隠棲した西行の寂寥さの背景に、ことのほか木枯らしと時雨がよく似合う。

「時雨のなかで紅葉を深めてゆく木々の梢を見ても、晩秋の山の背をこうこう鳴らして過ぎてゆく夜の嵐を聞いていても、何とこの世は心に染みる好きものに満ちているのか」と文にしたためた西行。現世を浮島のように眺め、それを虚無と感じつつも、現世が好きなのに、現世を捨てながら、奥州の覇者、藤原氏の本心を見極めるための陸奥への旅に出る。西行となって足を踏み入れた陸奥は、秋は荒く、空は冷たい色加わり、時雨が木々を鳴らした。木枯らしで散った落ち葉を踏み入った山道は、すでに黄葉で敷き詰められていた。北の黒ずんだ森に鳴る風の音に耳を傾け、氷雨の打つ時を越えた。

西行が隠棲し始めたころに庵を営んだ京都嵯峨野は、若狭湾から丹波を越えて降り渡った時雨でよく知られ、北山時雨が古都の風物詩となっている。晩秋から初冬にかけて、シ

時の最高権力者、鳥羽上皇の信頼厚い北面の武士、蹴鞠でも流鏑馬でも一頭地を抜き、風流人でもあり後に当代随一の歌人といわれたエリート、佐藤義清が二三歳の若さで突然、出家遁世して西行と号し、京都嵯峨野の奥深き草庵にこもり隠棲した。

辻邦生の『西行花伝』の序の章で「あの人のことを本当に書けるだろうか。……凹位上人、西行のことを。しばらく前から時雨が檜皮葺きの屋根を鳴らして過ぎてゆく。その幽かな音を聞いていると、そんなことはと

*カルマン渦は流体中を適当な速度で動く柱状物体の後方左右両側にできる、回転の向きが反対の二列の渦のこと。



ベリア寒気が暖かい日本海を吹き渡ると、小ぶりの入道雲のような一塊の積雲で成り立つ雲の帯が幾筋も幾筋もできる。次々に襲来す

る雨雲の通過で、降ってはやみ晴れ間がのぞき、またサーッとぬれるほどに降る。昼夜の別なく急な雨が襲来し、たちまち降るかと思えば、たちまち晴れる。若狭湾側の町々ではまだ上昇気流が強いので雨やみぞれの粒がやや大きいのが、丹波を越えて京都に達するころは弱い驟雨しゅううとなって町々をぬらす。

小倉百人一首で有名な歌人、藤原定家の隠棲した時雨亭が京都北部、小倉山にある。山深い庵、枯れた木々が時雨にぬれる有様はまさに風情そのものである。中里恒子の『時雨の記』では、主人公の一人に「定家は流石りやうせきに、風土をわがものにして、さつと降りかかっては消える、時を定めぬ雨が山路を濡らす隠棲の地を、時雨亭とは」と語らせている。『時雨だわ、さあつときで、さあつと過ぎるわ』

時雨か。

壬生は、堂の下にはいつて、煙るような細かい雨が、松の葉を光らせて消えてゆくのを見つめた。多江の髪の毛が濡れて、油のように光った

功成り初老にさしかかった主人公の男が、夫と死別した女性と時雨のごとくはかない恋に身を焦がす、しつとりとした大人のひそやかな恋の物語である。やがて男が急逝し、追憶の思いを胸に以前訪れた時雨亭を再び晩秋に訪れた多江は、晩秋の古都の時雨と鮮やかに

に色づいた紅葉の風情のなかで、追憶と惜別と新たな出発を歌う。

今ひとたびの逢うことも

なくてぞもみじ散りにける

時雨にぞもみじ散りにける

時雨は、「し」は風「ぐれ」は狂で、風に伴ってこつ然と降つてやむ雨ともいわれている。時雨のもつしつとりとした深い哀切な雰囲気は、縦糸に風、横糸に狂という激しさを織り込んだように思えてならない。政争に明け暮れる現世を浮島のように眺め、虚無を感じ、身分違いの高貴な人への思慕を断ち切つて出家した西行は、木枯らしが舞い狂い、そしてその後によつてくる波状的に静寂が繰り返す時雨を草庵で眺めながら、縦糸と横糸の絡み合う現世を超然としたのだろう。

木枯らしとともに、冬の手触れとなる時雨が遅ればせながらやってくる、幾度となく時雨が繰り返され、やがて山のほうでみぞれが雪に変わり、あられが混じりながら里に降りてくると冬の到来である。

〈むらまつ てるお〉一九四五年、静岡県生まれ。気象大学校卒。理学博士。専門は台風、天気予報学。気象大学教授、札幌管区気象台技術部長、名古屋地方気象台長を経て、〇三年より現職。七〇年には南極観測越冬隊に参加。著書に『台風のエネルギー』、『大気とその運動』『気象と生活』(ともに共著)、『天気のかくみ』(監修)など。